

新生国家から遠く離れて一戦間期のトドロヴィチの活動（１）

Far from the New-Formed State: D. Todorović's activities in Japan in the interwar period (1)

柴 宜弘（城西国際大学）

Nobuhiro Shiba (Josai International University)

はじめに

- １．チェコ人ニクルとの交流
- ２．チェコスロヴァキア軍団との関わり
- ３．セルビア義勇軍将校の訪問
- ４．ハプスブルク帝国捕虜の本国送還支援

以下次号

- ５．東京外国語学校のロシア語教員
- ６．満州国訪問
- ７．第 15 回赤十字国際会議
- ８．ブケリッチとの交友関係

むすびに代えて

Abstract

The purpose of this paper is to discuss the activities of Dušan Todorović, a professor of Russian language at Tokyo School of Foreign Languages in the interwar period. Todorović contributed to Russian language education in Japan and played an important role as a ‘private diplomat’ of the new-born state, the Kingdom of Serbs, Croats and Slovenes. Because these two countries didn’t build their diplomatic establishments each other at that time. The paper focuses on the period from World War I to 1940 leaving Tokyo for California. This is the first half of the paper, tracing his activities until the middle of 1920s, such as friendship with a Czech philologist, Alois Nykl, works as a translator for sick and wounded soldiers of the Czechoslovakia Legion from Siberia through the Japanese Red Cross Society and his activity like a ‘private diplomat’ toward South Slav war prisoners (officers and men of the Hapsburg Empire) at Aonogahara and Narashino camps.

Keywords: Dušan Todorović, Alois Richard Nykl, the Czechoslovakia Legion, South Slav POW in Japan, World War I

はじめに

「…当時、なにか青春のやり場に困って、仲間のうちの流行になっていた語学放浪の渦にまき込まれていた十吉は、気まぐれに籍を置いてみたその学院の夜間部で、二年ほど小幡氏からセルボ・クロアート語の手ほどきを受けたことがある。…真鍮の色のまだ真新しい表面に、DÉLÉGATION COMMERCIALE D'ÉTAT DES...と型どおりのフランス語の文字が、四五段ほど浅彫りになっている。DES の後には構成民族の名が三つも続いて、おそろしく長い国号である。そのおのおのの頭文字である S と C と S の三字だけが、わざわざ赤で入れてあるところなど、いかにも新興の多民族国家らしい華やかさがある。…」¹

これは、ロシア文学、とくにチェーホフの翻訳家として知られている神西清の短編小説『灰色の眼の女』の冒頭部分の一節である。この小説は、1930 年ころの J 国商務館が舞台となっている。「セルボ・クロアート語」を学んだ主人公の埴生十吉がこの商務館に勤務することになり、小説が展開される。実際には戦間期に、日本とユーゴスラヴィアが相互に在外公館を設置することはなかった²。神西がなぜ J 国（ユーゴスラヴィア王国、1929 年までの正式な国名はセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国）という新生国家の商務館を小説の舞台に選んだのかについては、第 5 章で取り上げることにする。

筆者はこれまで『中欧研究』に、ユーゴスラヴィア人（セルビア人）で 1909 年から 1940 年まで、東京外国語学校のロシア語教師を務めたドゥシャン・トドロヴィチ Dušan Todorović について論考を発表してきた³。本論はそれらの論考の続編であり、ここではトドロヴィチの戦間期の日本での活動に焦点を当てることにする。トドロヴィチはロシア語教師として教鞭をとる一方、日本に長期滞在する唯一のユーゴスラヴィア人（セルビア人）として、「民間大使」の役割を果たした。1929 年に相互に名誉領事館が設置され、名誉領事が任命されたのち、トドロヴィチの「民間大使」としての役割はようやく終了する。

本稿では、トドロヴィチ夫妻が 31 年間におよぶ東京での生活に区切りをつけ、1940 年にアメリカのカリフォルニアへ移住するまでのトドロヴィチの活動を時系列的に跡付けてみたい。東京で出会い、戦間期を通じて断続的に手紙での交信を続けたチェ

¹ 神西清『灰色の眼の女』中公文庫、1976 年、10-12 ページ。三島由紀夫がこの文庫本の解説を書いている。

² この時期の日本とユーゴスラヴィアの関係については、柴 宜弘「新生国家ユーゴスラヴィアと日本—両国交流の黎明期を中心に」E-ジャーナル『中欧研究』第 5 号、2020 年を参照。

³ 柴 宜弘「ロシア語教師ドゥシャン・トドロヴィチと第一次世界大戦—辺境地域出身者のナショナル・アイデンティティ」E-ジャーナル『中欧研究』第 4 号、2018 年；同上論文。

コ人アロイス・リハルト・ニクル Alois Richard Nykl (写真 1 参照) との関係、ニクルとの書簡のやり取りのなかに見られる第一次世界大戦の捉え方、十月革命後のソヴィエト政権への反発とアメリカへの思い、日本赤十字社を通じてシベリアから日本に送られてきたチェコスロヴァキア軍団傷病兵の支援、日本の収容所にいたハプスブルク帝国軍の南スラヴ捕虜解放作業への関わり、東京外国語学校でのロシア語教育、満州国訪問、東京で開催された赤十字国際会議へのユーゴスラヴィア代表としての出席、1933 年にユーゴスラヴィアの日刊紙『ポリティカ』の東京特派員としてやってきたブランコ・ヴケリッチ Branko Vukelić との交友関係に焦点を当てる。ヨーロッパでは第二次世界大戦が始まり、きな臭い状況が日々強まっていた 1940 年に、新生国家ユーゴスラヴィアから遠く離れて東京で生活していたトドロヴィチ夫妻が、なぜアメリカに移住したのかについても考えてみたい。

1. チェコ人ニクルとの交流

1909 年に、ロシア帝国のハバロフスクから知人のまったくいない日本にやってきたトドロヴィチ夫妻にとって、東京での交友関係は限られていたものと思われる。トドロヴィチにとって、在東京のロシア大使館やロシア人たちとの付き合い以外で交友関係を深めたのがチェコ人のニクルだった。当時、横浜を中心にチェコ人の建築家が活動していた。チェコにおける建築の伝統は中世以来続く豊かなものだが、その近代建築について若干ふれておく。世紀末のハプスブルク帝国では、様々な文化が花開いた。それは首都のウィーンだけではなく、プラハやブダペストも同様であった。とくに、産業化の進むチェコ（ボヘミア）地方では、18 世紀にいち早く工業技術を学ぶ教育機関がプラハに設置され、19 世紀初頭にはプラハ工芸学校（現在はチェコ工科大学）として整備されて建築学も重要な分野となった。ウィーンで開花した世紀末の文化のなかで、建築の分野において旧来の伝統を打ち破り、機能性を重視したウィーン分離派の運動を牽引したのがオットー・ワグナー Otto Wagner であり、そのもとで学んだのが「チェコ近代建築の父」と称されるヤン・コチェラ Jan Kotěra であった。コチェラはチェコに戻り、分離派の様式を備えた多くの建築を残すと同時に、プラハ工芸学校で教鞭をとり、若い建築家を輩出した。

明治末期の 20 世紀初頭、このプラハ工芸学校出身のチェコ人が横浜の建築事務所にいた。ドイツ人のゲオルグ・デ・ラランデ Georg de Lalande の建築事務所で働いていたのは、建築家のヤン・レツル Jan Letzel と技師で新渡戸稲造の『武士道』をチェコ語に翻訳していたカレル・ヤン・ホラ Karel Jan Hora である。レツルはカイロの建築事務所勤めをしていた際、カイロで活動していたデ・ラランデと知り合い、日本で建築事務所を開いた彼を頼って 1907 年に来日した。ホラはすでにこの事務所で働いており、二人は 1909 年にデ・ラランデの事務所から独立して、「レツル・アンド・ホラ合資会社」を設立して、多くの建築に携わった。しかし、ホラは竹本福と結婚し、

1913年には合資会社を解散して、妻の福とともに上海に渡り、その後プラハに帰国した。解散直後の時期に、レツルが設計したのが、広島県物産陳列館（原爆ドーム）である⁴。

1911年、「レツル・アンド・ホラ合資会社」のホラを頼ってやって来たのが、ニクルだった。ニクルはプラハのカレル大学で言語学を学び、ドイツ語、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語などのヨーロッパ諸語だけでなく、アラビア語も駆使することのできるポリグロットであった。カイロからアジアの旅に出たニクルは、インド、中国を経由して日本に到着した際、資金を使い果たしていたようで、来日するとすぐに横浜にある「レツル・アンド・ホラ合資会社」の事務所を訪れた。ニクルがこの事務所で働かせてほしいと頼むと、ホラは好意的だったが、レツルは財政事情を考え色よい返事をしなかった。ニクルはホラの紹介で、日本自動車倶楽部の雑誌『オートモビル』の編集に携わることになる⁵。

ニクルはコーランをアラビア語からチェコ語に翻訳した人物であったことからして、イスラーム教について多大な関心をいただいていたことは容易にうかがえる。ニクルとトドロヴィチとの最初の出会いを裏付ける資料はないが、二人は当時、東京外国語学校二人目のヒンディー語教師として教鞭をとっていた、インド人のムハンマド・バラカトゥッラー Muhammad Barakatullah を介在して知り合ったと思われる。バラカトゥッラーは1909年から1914年までヒンディー語を教えたが、汎イスラーム主義者であり反英独立運動の活動家としても知られていた⁶。ニクルは日本でイスラームの普及活動を行っていたバラカトゥッラーに接触し、バラカトゥッラーを通じて東京外国語学校で同僚であったトドロヴィチがニクルと知り合ったと推察することができる。1912年末に、バラカトゥッラーからトドロヴィチに宛てた自筆の新年のあいさつ状（写真2参照）には、本人の写真が印刷されており、その写真の背後には英字新聞『イスラーム同胞』が置かれていて興味深い⁷。バラカトゥッラーは、同じ時期に日本に滞在したロシア生まれのトルコ人・ムスリム活動家アブデュルレシト・イブラヒム Abdürresid Ibrahim と東京で親交を結び、日本のアジア主義者に「イスラーム世界」の意義を伝える活動に協力している⁸。

しかし、トドロヴィチがニクルとの関係を深めたのは、イスラーム教に関する関心からではなく、第一次世界大戦に関するニクルの見解に共鳴する点が多かったからであろう。ニクルはハプスブルク帝国の統治下にあったボヘミア出身のチェコ人として、

⁴ 矢田部順二「原爆ドームの来歴とヤン・レツル——日＝チェコ文化交流史の視点から」『修道法学』（広島修道大学）39巻2号、2017年、628－629ページ。

⁵ 吉澤聆子『ボヘミアに生きた明治の女 フク・ホロヴァーの生涯を追って』草思社、2002年、99－104ページ。

⁶ 『東京外国語大学史』東京外国語大学、1999年、1076ページ。

⁷ この絵葉書は、トドロヴィチの次男ドラグティンの息子で、カリフォルニア在住のデ INA・トドロヴィチ氏の所蔵。

⁸ 小松久男『イブラヒム、日本への旅——ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房、2008年、88－89ページ。

セルビアに対して戦争を始めたドイツやハプスブルク帝国に対する批判的な見解をもっていた。ニクルは当時のボスニアが置かれていた半ば植民地状態のなかで、サラエヴォ事件が生じたことを理解していた。サラエヴォ事件については、現在でもハプスブルク帝国の皇位継承者フランツ・フェルディナンド Franz Ferdinand 大公夫妻の暗殺事件として理解される傾向が強く、ハプスブルク帝国統治下のボスニアの状況を理解しようとする視点は乏しい⁹。

ニクルは同時代にあつて、主として英文の新聞や資料から第一次世界大戦を丹念に追っていた。かれの見解は、ニクルがつけていた日記から窺うことができる。1915年10月23日の日記には、「横浜文学・音楽協会 Yokohama Literary and Musical Society—『セルビアとセルビア人』に関する興味深い講演」という記事の切り抜きが張り付けられている¹⁰。この記事によると、ニクルはすでにこの協会でスラヴ人の歴史についての講演を数回行っており、今回はセルビアとセルビア人にテーマを絞って講演を行った。「...私たちは、サラエヴォ事件をめぐる議論全体が、テロリズムの方策を採った一民族を抹殺しようとするドイツとオーストリアの側の『作り話』であることをこの講演で知った。...」という一節から、ニクルの講演の意図が伝わってくる。

トドロヴィチは第一次世界大戦が始まると、遠く離れた母国セルビアの窮状に心を痛め、その支援活動を始めた¹¹。妻カテリーナの協力を得て塞国（セルビア）救難会を組織したのは、1915年6月頃のことである。義援金を集めるため、「セルビアとセルビア人」に関する英語の講演会が10月23日に帝国ホテルで開催されることになった。ニクルの見解に共鳴していたトドロヴィチは、英語も流暢なニクルの語学力を頼り、5月にニクルが住む横浜に出向き、写真や資料を渡して英語による講演原稿とスライドの作成を依頼した。ニクルはこの依頼を快諾して準備に取りかかった¹²。6月には、ニクルがトドロヴィチの東京の自宅を訪れて、講演原稿の打ち合わせをしている¹³。拙稿「ロシア語教師ドゥシャン・トドロヴィチと第一次世界大戦——辺境地域出身者のナショナル・アイデンティティ」の21ページ注72で示した『ジャパン・タイムズ』の1915年10月24日付けの記事にあるトドロヴィチの母親からの書簡の英語訳もニクルの助力のお陰である。トドロヴィチの講演会は大盛況だった。ニクルはこの記事だけでなく、講演会の予告記事の切り抜きも日記に張り付けているが、それ

⁹ サラエヴォ事件については、柴 宜弘「サラエヴォ事件と第一次世界大戦——プリンツィプ評価の変遷」柴 宜弘・山崎信一編『ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための60章』明石書店、2019年、59–63ページを参照。

¹⁰ Archives of the Naprstek Museum (Prague, Czech Republic), Nykl, Box 78/2, Diaries, Oct.23, 1915. 日記には、日本の新聞の切り抜きも張り付けられているが、文章はチェコ語と英語が混在しており、署名はアラビア語の箇所も散見される。

¹¹ 第一次世界大戦中のトドロヴィチのセルビア支援活動については、以下の拙稿を参照。柴 宜弘、前掲論文、14–22ページ。

¹² Josef Ženka (ed.), *Alois Richard Nykl: Pedesát let jazykozpytce a filosofa*, Univerzita Karlova a Národní Muzeum, Praha, 2016, 517-518.

¹³ Archives of the Náprstek Museum (Prague, Czech Republic), Nykl, Box 78/2, Diaries, June 13, 1915.

らの記事のトドロヴィチ教授による講演という個所のトドロヴィチの名をすべて棒線で消し、ニクルと修正してあるのは興味深い。

日記からニクルの遣る瀬ない心情が伝わってくるが、二人の手紙の交信はその後も断続的に20年以上続いた。トドロヴィチの書簡はロシア語、ニクルの手紙は英語であった。1916年に、ニクルは日本で蓄えた資金を携え、言語学の研究を進めるためシカゴに向けて離日した。ニクルの離日は突然だったようで、トドロヴィチはニクルに別れの挨拶もできないまま、二人の交信は一時途絶えてしまった。この時期、トドロヴィチはセルビアの救援活動で多忙を極め、セルビア王国政府の依頼を受けて、在東京の「民間大使」の役割を担っていたことがその主たる理由と思われる。1920年1月、トドロヴィチはニクルに宛てた手紙で、「昨日、あなたからの手紙を受け取り、とてもうれしく思いました。あなたとまた連絡をとることができます。アメリカからあなたの手紙を一度受け取りましたが、雑事にかまけて、すぐに返信できませんでした。そうこうするうちに、あなたの住所をなくしてしまい、連絡が途切れてしまいました。心からお詫び申し上げます。…」¹⁴と書いている。4年ぶりに手紙のやり取りが再開した。

この後も二人の交信は続いたが、トドロヴィチの4人の息子がすべてアメリカの大学に進学にしたあとは、次男のドラグティンがニクルに様々な相談をすることが多かったようで、ドラグティンの英語の書簡の一部がナールプステク博物館に保存されている¹⁵。

2. チェコスロヴァキア軍団との関わり

トドロヴィチはさらにチェコ人との関係を強めたようである。ニクルへの書簡や周辺の資料から、トドロヴィチ夫妻がロシア語通訳として、シベリアから日本に送られてきたチェコスロヴァキア軍団傷病兵の身の回りの手伝いなどにあたった。前述の書簡では、第一次世界大戦後に誕生した新生チェコスロヴァキア共和国を歓迎すること、チェコ人は世界でも誇るべき文化的で民主的な民族であることが述べられ、ミラン・シチェフアーニク Milan Radislav Štefánik 将軍（スロヴァキア人、写真3参照）も言及されている。ロシアで編成され、チェコスロヴァキアの建国に重要な役割を果たしたチェコスロヴァキア軍団¹⁶の兵士が、1918年末の終戦以後もロシア内戦に巻き込まれてシベリアに残留していた。10月には、シベリアの軍団を訪問する途上、チェコス

¹⁴ Archives of the Náprstek Museum (Prague, Czech Republic), Nykl, Box,117, Todorovič, Dušan, January 18, 1920.

¹⁵ Archives of the Náprstek Museum (Prague, Czech Republic), Nykl, Correspondence, Todorovič to Nykl (uncatalogued).

¹⁶ チェコスロヴァキア軍団については、林忠行「チェコスロヴァキア軍団——未来の祖国に動員された移民と捕虜」山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『現代の起点 第一次世界大戦 2 総力戦』岩波書店、2014年を参照。

ロヴァキア独立運動の指導者の一人であったシチェファーニクが来日して、日本政府にチェコスロヴァキア問題を説明し、軍団が日本経由で安全に帰国できるよう協力要請を行った¹⁷。

この折に、シチェファーニクは、シベリアで病気になり日本赤十字病院で療養していた軍団兵士を見舞った。セルビアへの支援活動を通じて、日本赤十字社と密接な関係をもっていたトドロヴィチ夫妻は、軍団兵士とのロシア語通訳を依頼されていた。カテリーナ夫人が面倒を見ていた兵士カレル・クニトルが死去し、19日に盛大な葬儀が行われた。チェコスロヴァキア軍団が発行していた新聞『チェコスロヴァキア日刊新聞』は、「10月19日に行なわれた葬儀は、チェコスロヴァキア軍兵士に対する真の敬意表明だった。棺の上の花輪のなかで目立ったのは、『戦友へ、シチェファーニク將軍』という献辞のついたシチェファーニク將軍から捧げられた花輪だった。日本の大新聞のひとつは、兄弟クニトルの死去と、チェコスロヴァキア人兵士の典型的運命を描いた彼の経歴を報じたが、その記事は、故人の最後の願いは、祖国解放のための戦いへの復帰だったという、トドロヴィチ夫人の話で終わっている」¹⁸と伝えている。

麻布の教会で執り行われたクニトルの葬儀は、チェコスロヴァキア軍団の存在をアピールする政治的な目的も顕著で、在京の各国外交官や武官、日本海軍や陸軍そして政府の代表が参列した¹⁹。トドロヴィチ夫妻も参列しており、この時シチェファーニクと同席し、話す機会があったのであろう。「私はかれの才能に敬服しました」とその印象を書いている²⁰。この1月18日付の書簡には、セルビア王国救援のため、セルビア赤十字社を通じてこれまでに3万円の義援金を送ったこと、カテリーナも慈善コンサートを行い1500円寄付したこと、3人の息子たちはハルビンの商業学校に通い、末っ子のヴィクトルだけが一緒に暮していることなどがふれられている。

シベリアにいたチェコスロヴァキア軍団の日本経由の本国帰還は1919-20年に実施され、その数は6万7千人におよんだため、日本でもチェコスロヴァキアという新生国家の存在が知られるようになった。シチェファーニクは日本滞在時に軍団兵士の本国帰還を進めるため、東京に軍団の連絡事務所を開設して、ヴァーツラフ・ニエメ

¹⁷ 長與 進「ミラン・ラスチスラウ・シチェファーニクの日本滞在——再論」長縄光男・沢田和彦編『異郷に生きる——来日ロシア人の足跡』成文社、2001年、94-96ページ。シチェファーニクの伝記については、ヤーン・ユリーチェク、長與 進訳『彗星と飛行機と幻の祖国と』成文社、2015年を参照。

¹⁸ *Československý denník*, 25. říjen 1918. (翻訳は長與進氏の提供による)

¹⁹ ジャン＝ガスパール・パーレニーチェク、高松美織訳「ああ、我が日の出る国——チェコ文学におけるジャポニズム」静岡市美術館講演会（2020年4月25日、中止）資料、20ページ <https://shizubi.jp/g42zbx6765w/wp-content/uploads/2020/04/20200418.pdf>

²⁰ Archives of the Náprstek Museum (Prague, Czech Republic), Nykl, Box, 117, Todorovič, Dušan, January 18, 1920.

ツ Václav Němec 大尉を責任者として任命した²¹。両国の外交関係が樹立され、チェコスロヴァキア公使館が東京に開設されるのは1920年1月であるが、この間、ニエメツは代理公使の役割を果たしていた。4月に、初代公使カレル・ベルグレルが着任した²²。

前述した建築家レツルは公使館員として採用された。4月18日付のニクル宛のトドロヴィチの手紙には、これと関連した記述がみられる。トドロヴィチは、ドイツ資本に踊らされたボリシェヴィキが抑圧的な支配を強めるロシアを批判したうえで、スラヴ人の国家である新生チェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアが政治的・経済的な協力関係を築くことが必要であるとの自説を述べる。二人はそれぞれ、新聞や雑誌を送りあっていて、アメリカの状況を知り、アメリカに強く惹かれると告白し、レツルが在東京の公使館で働いているのだから、ニクルもチェコスロヴァキアに帰れば、貢献できる仕事があるはずだと述べ、帰還を勧めている。1週間ほど前、ニエメツ代理公使に会う機会があり、その際ニクルについて知らせておいたこと、トドロヴィチも近くユーゴスラヴィアに行こうと考えているが、ロシア語教員の仕事があるので、それが実現できたとしても、また東京に戻るだろうと書いている²³。

トドロヴィチ夫妻がニエメツ氏からの依頼を受けて、シベリアから日本赤十字病院に移送された入院中の軍団兵士たちの通訳を引き受けていたことは、以下の記事からうかがえる。「本年始め我浦潮に於ける救護班病院より後送せられ一月十三日本社病院に收容せられたるチェック軍患者二十名は我国の温和なる気候と我赤十字の深大なる慈悲とに抱かれ、本社病院長以下医員看護婦の熱誠親切なる治癒看護を受け日に日に治癒に赴き、今は長途の航海に堪ゆる程に回復せるを以て、我国に後送せられたるチェック軍患者の監督ネメック大尉と協議の上門司より乗船帰国する為二月十六日一同退院出発することとなりたるに付、其退院前日即ち十五日午後五時本社長石黒男爵主人となり本社病院内看護婦集会室に於送別の宴を催し、ネメック大尉、通訳の労を執りし東京外国語学校教授トドロウキチ氏夫妻、徳川副社長…」²⁴。会の最後に石黒社長が送別の言葉を述べた。東郷囑託が英語に通訳し、これをニエメツがチェコ語に通訳した。ニエメツは日本国民と日本赤十字に深く感謝の意を表し、全員でチェコスロヴァキア国歌を歌って送別会を終えた。

²¹ 長與進「資料1 日本とチェコスロヴァキアがいちばん近かった2年間（1918－1920年）」『M.R.シチェフアーニクの日本滞在展示会 配布資料』早稲田大学図書館、2018年。3ページ。

²² 同上論文

²³ Archives of the Náprstek Museum (Prague, Czech Republic), Nykl, Box,117, Todorovič, Dušan, April 18, 1920.

²⁴ 「チェック患者退院」『博愛』383号、1919年（大正8年）3月、18ページ。

3. セルビア義勇軍将校の訪問

トドロヴィチはチェコスロヴァキア軍団と関わりをもっただけではなく、シベリア鉄道経由で日本にも立ち寄ったセルビア義勇軍関係者の訪問も受けている。そして、1918 年 12 月に南スラヴの統一国家であるセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国が建国されると、日本の捕虜収容所にいたハプスブルク帝国の南スラヴ捕虜の本国帰還に関与し、新生国家の「民間大使」としての役割を担った。

まず、トドロヴィチは直接関与していないが、チェコスロヴァキア軍団と同様に、ロシア戦線で捕虜となったハプスブルク帝国軍の南スラヴ兵士から結成されたセルビア義勇軍²⁵の移送について若干ふれておく。セルビア義勇軍と日本軍との初めての出会いだったからである。ロシア革命後の混乱を避けるため、セルビア義勇軍 1 万 2 千 500 人のサロニカ戦線への移送が始まった。4 連隊編成のセルビア義勇軍のうち第 3、第 4 連隊はシベリア鉄道、南満州鉄道を経由して大連に移動し、そこからサロニカ戦線に向かった。第 3 連隊に所属するセルビア人将校ジュリッチ（写真 4）は自らの体験を 1930 年代にルポルタージュとして発表し、南満州鉄道車両の清潔さ、日本軍将校の礼儀正しさ、大連での日本軍との交歓の様子を書いている²⁶。

これは日本側の史料からも確認される。1918 年 3 月 5 日付の外務省から陸軍次官と参謀次長に宛てられた報告「塞国軍隊輸送ニ関スル件」には、「露国戦線ニ在リタル塞国軍隊約四千名ハ南満鉄道ニ依リ大連ニ輸送セラレ二月二十三日全員大連ニ集合英国運送船ニ搭乗シ二月二十五日目的地（西部戦線ナルカ如シ）ニ向ケ出帆セリ状況左ノ如シ...」とあり、その様子が詳細に報告されている。「参考事項」として、日本軍は 2 月 23 日、大連の大和ホテルにセルビア義勇軍の将校 9 名を招待し、会食してその労をねぎらい、今後の健勝と奮戦を祈る旨を伝えた。これに対して、「塞軍旅団長ハ自国ノ蹂躪セラレタルカ為メニノミ戦フニ非ス自由ト正義ト人道ノ為メ戦フナリトノ意ヲ述ヘ謝意ヲ表セリ」。日本軍に対する印象については、「塞国将校ノ日本将校ニ対シ語リタル中ニ左ノ如キ事項アリ日本ノ勢力圏内ナル南満鉄道ニ乗車シテヨリ沿線ノ状況一変シテ緊縮シアルニ一驚セリ日本軍人ハ秩序正シク数度ノ戦役ニ常ニ勝利ヲ得タル原因モ概ネ知ルヲ得タリト」記されている。ジュリッチはセルビア義勇軍の特色として、兵士の数に比して将校の数が多いことをあげているが、ここではその理由が「下士兵卒ノ数ニ比シ将校ノ数多キハ敵国ニ占領セラレ徴兵ノ途絶エ下士卒ノ補充ヲ為シ能ハス為メナリ」と述べられている。最後に、「露戦線ヨリ迂回後

²⁵ セルビア義勇軍については、柴 宜弘「それぞれのユーゴスラヴィア——セルビア義勇軍の理念と実態」大津留厚編『「民族自決」という幻影——ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国の成立』昭和堂、2020 年、37—61 ページを参照。

²⁶ А. Д. Ђурић, *Ка победи; ратнидневник*, Издавачко и књијарско Геца кон А.Д. Београд, 1938; 柴、同上論文、54—55 ページ。

本日ニ至ル迄恰モ百日ナリ久シ振リニテ安楽トナルハ好ム所ナリ今後目的地迄ハ一月半ヲ要ストノコト其後ノコトハ予想シ得スト」²⁷と結んでいる。

このセルビア義勇軍と関連して、トドロヴィチはかれの存在を伝え聞いたセルビア王国軍将校ラドイェ・ヤンコヴィチ Radoje Janković（写真5参照）とも東京で面談している。ヤンコヴィチは波乱の人生を生き抜いた興味深い人物である。1916年にセルビア王国の摂政アレクサンダルを命を受けて、ロシア皇帝やロシア政府とともにセルビア王国の宣伝活動をするため、ペテルブルクに赴いた。ロシアで発行されていた雑誌にセルビアの窮状を訴える記事を多数書いた。1917年のロシア革命に遭遇し、ロシア臨時政府のケレンスキー、ソヴィエト政府のレーニンやトロツキーの演説を目の当たりにして、その印象を日記²⁸に書き付けている。ヤンコヴィチはセルビア軍内の一勢力である「黒手組（正式名称は統一か死か）」に属する将校であったため、1917年5月、「黒手組」の指導者アピスを裁くサロニカ軍事法廷²⁹に連座して、15年の実刑判決を受けた。ヤンコヴィチはサロニカで刑に服することを拒否し、軍籍を離れて逃亡生活を選んだ。ロシアで逃亡生活中の1918年にはナタリヤ・カルミッチと結婚し、シベリア鉄道でウラジオストクに向かい、日本を経由して帰国の途についた³⁰。

この間、ヤンコヴィチ夫妻は1918年8月にウラジオストクから敦賀に着き、日本に1か月ほど滞在した。ウラジオストクで日本行きを計画していた7月28日（新暦、以下の日付も同様）のヤンコヴィチの日記には、「私の日本行きは円の高騰によって延期されている。日本や中国の由緒ある都市を訪れるには莫大な費用が必要だ。5千ルーブルでは千円のものしか買えない。当地では5千ルーブルで5か月生活できるが、日本では1か月しか暮らせない」³¹とある。オタシェヴィチ編のヤンコヴィチの

²⁷ JACAR（アジア歴史資料センター）欧受大日記、Ref. C03025010700 1037-1048 塞爾比亜兵輸送ニ関スル件、大正7年（1918）3月12日（防衛省防衛研究所）。この報告には、ポーランド人青年とルーマニア人商人がハルビンからセルビア義勇軍の列車に乗り、大連に到着したことが記されている。ポーランド人青年は指揮官に乗車を拒否されたが、ひそかに列車に乗り込んだ。しかし、大連でイギリス領事から11円を与えられて、長春に送還された。ルーマニア人商人はハルビン日本領事の証明書を携えていたので、英国領事が乗船を許可した。当時のハルビンには、多様な人が居住していたことの一端がうかがえる。

²⁸ Даница Оташевић (ред.), Радое М. Јанковић: У вихору октобарске револуције (1916-1918), Радио Телевизија Црбије, Београд, 2019.

²⁹ D・マッケンジー、柴・越村・南塚・長場訳『暗殺者アピス——第一次世界大戦をおこした男』平凡社、1992年；柴 宜弘「それぞれのユーゴスラヴィア——セルビア義勇軍の理念と実態」大津留厚編『「民族自決」という幻影』昭和堂、2020年、61ページ注17を参照。

³⁰ ヨーロッパに到着したヤンコヴィチは、新生ユーゴスラヴィア王国軍部の庇護を受けながらローマに滞在し、1919年3月には妻ナタリヤが娘ヴィドサヴァを出産している。ヴィドサヴァはベオグラード大学哲学部の英文学教授を務め、2016年8月に97歳で死去した。生前最後のインタビューは、'Данас славим 97. роџендан, распродајем све што имам', Политика, 6.марта, 2016. 1923年、ヤンコヴィチは家族とともにユーゴスラヴィアに帰国すると、逮捕され収監された。しかし、1925年にはアレクサンダル国王の恩赦により釈放され、その後外交官の道を歩むことになる。

³¹ Даница Оташевић (ред.), Радое М. Јанковић, 346.

日記は、8月21日にウラジオストクから日本に向けて出発する直前の16日で終わっている。ヤンコヴィチの日本での行動については現在のところ、断片的にしか追うことができない。ヤンコヴィチはウラジオストクで、モンテネグロ王国のための活動をしていたトミッチからトドロヴィチの住所を伝え聞き、東京に着くとトドロヴィチ宅を訪問している。9月11日付の日記には以下の記述がみられる。

麻布区竜土町のトドロヴィチ宅に行く。トドロヴィチ宅にはゲオルギー（「ニコライ堂」の主教）、夫人、4人の息子のうち一人だけがいた。他の三人の息子たちはハルビンに在るとのこと。かれらはミンゴキ（妙高のことか）の別荘から戻ってきたばかりだ。様々なことを語り合った。トドロヴィチは日本について、政治家がよくないと言った。彼らにとっての権威はアメリカだ。私の立場について聞いてくる。かれはセルビア政府が誠実さを欠いていると不満を述べた。セルビア政府は勲章の授与を約束したが、2年たっても届かない。4万3千カートン kola の物資を送った。摂政アレクサンダル病院が必要とした量である。現金も予定していた額以上集まったとのこと。トドロヴィチは親切で、社交的でモンテネグロ人タイプの人物だ³²。

トドロヴィチは情報通のヤンコヴィチを通じて、様々なニュースを聞いたものと推察することができる。ニクルへの手紙の中で、トドロヴィチが「ボリシェヴィキはドイツの資金提供によって行動している」と書いているが、この情報もヤンコヴィチを通じて知り得たのであろう。

4. ハプスブルク帝国捕虜の本国送還支援

1919年から20年にかけての時期、トドロヴィチはハプスブルク帝国捕虜の本国帰還の作業も依頼された。第一次世界大戦に際し1914年8月、日本は日英同盟を口実に中国山東半島の膠州湾を租借していたドイツ攻撃に着手する。イギリス軍の支援も受けて、膠州湾の中心都市青島に向け陸・海軍7万を超す大軍を派遣した。ドイツ軍は総勢5千にすぎなかった。11月初め、ドイツ軍は降伏し、4千7百人の将兵が日本軍の捕虜となった。この捕虜の中には、ハプスブルク帝国海軍の巡洋艦カイゼリン・エリーザベト号の乗組員が300名ほど含まれていた。これら捕虜のうち約230名が兵庫県の青野原捕虜収容所にいたが、次いで多かったのは千葉県習志野収容所であっ

³² ヤンコヴィチの日本滞在時の日記は未整理で公開されていないが、その日記を保管しているオタシェヴィチ・前チャチャク市立図書館長に連絡したところ、トドロヴィチの名が出てくる2箇所を活字体にして筆者に送ってくださった。オタシェヴィチ氏の好意に感謝を表したい。引用部分は9月11日付けの日記である。

た³³。当然のことながら、南スラヴ出身の将兵が含まれていた。かれらの本国帰還にあたっては、新生国家セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（ユーゴスラヴィア）の外交公館が設置されていなかったため、その作業はユーゴスラヴィア政府の依頼を受け、在東京のフランス大使館が代行した。トドロヴィチは直接には在東京のフランス大使館を通じて、南スラヴ捕虜の本国帰還に関与することになる。

この時期、シベリアからチェコスロヴァキア軍団の本国帰還と、青野原および習志野の両収容所にいた南スラヴ捕虜の解放が重なった。先に述べたように、公使代理の役割を果たしていたニエメツ大尉は日本に新生国家ユーゴスラヴィアの公館が設置されていない状況を考慮し、日本の外務省に対し両収容所の南スラヴ捕虜を解放し、シベリアのチェコスロヴァキア軍団に服役させる提案をしている³⁴。南スラヴ捕虜のなかで、とくにスロヴェニア人兵士を中心に検討した論文で、ベルタラニチュが述べているように、ニエメツはチェコスロヴァキア軍団で活動した人物であり、スラヴ主義者で南スラヴ捕虜の解放に強い関心をもっていた³⁵。ユーゴスラヴィアの国家承認が遅れていたため、チェコスロヴァキアが「受け皿」になることで、軍団兵士と同様に南スラヴ捕虜のすみやかな解放を求めたのであろう。ニエメツはトドロヴィチからも、南スラヴ問題や新国家の建国についての情報を得ていたと思われる。

一方、4月2日に、講和会議が開催されていたパリ³⁶で、セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国公使館は日本大使館に直接接触し、ハプスブルク帝国軍の南スラヴ捕虜解放を日本の当該機関を通じて進めることを依頼している³⁷。この新生国家は同時に、第一次世界大戦の時期から緊密な関係をもつフランスに捕虜解放の実施を要請した。4月19日、在東京のフランス大使バプストは日本外務省に次のような覚書を出した。

塞爾比亞国政府ハ奥国軍艦カイゼリン、エリザベス号ニ於テ俘虜ト為リ目下日本ニ収容セラレツツアル百五十名ノユーゴスラヴ族水兵ノ解放セラレムコトヲ希望シツツアルニ依リ仏国大使ハ本国政府ノ訓令ニ基キ右ノ点ニツキ日本帝国政

³³ 大津留厚『青野原俘虜収容所の世界——第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』山川出版社、2007年、8ページ。

³⁴ JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1271—1273 在本邦「ユーゴスラヴ」人俘虜解放方「ネメツ」大尉ヨリ申出ノ件、大正8年（1919）4月19日（防衛省防衛研究所）。

³⁵ Boštjan Bertalančič. ‘Exploring the Origins of Japanese-Yugoslav Relations during World War I through the Case of Yugoslav POWs in Japan’ 『中欧研究』創刊号、2015年、8ページ。

³⁶ パリ講和会議におけるセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国の活動については、柴 宜弘「新生ユーゴスラヴィアと日本——両国交流の黎明期を中心に」『中欧研究』第5号、2020年を参照。

³⁷ JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1540—1541「セルブクロアートスロヴェーヌ王国」俘虜解放ニ関スル件、大正8年（1919）6月23日（防衛省防衛研究所）。

府ノ注意ヲ喚起シ且出来得ル限り速ニ右俘虜解放ノ措置ヲ講セラレムコトヲ要請ス³⁸

この要請を受けて、ニエメツは在東京のフランス大使と会談して捕虜解放の方策について協議した。日本側はニエメツの提案をすでに受け入れていたので、その提案が捕虜収容所にも伝えられ、この提案を受け入れてすぐに解放を望む捕虜も生じていた。バプスト仏大使との会談後、ニエメツは「仏国大使ハ塞爾比亞国利益代表者トシテ右ニ関スル必要ナル措置ヲ講スヘキ趣ニ有之候」という事情を配慮して、自らの提案を取り下げる旨、内田外相に伝えた³⁹。ニエメツにとって、提案の取り消しは不本意だったようで、外務省の知人に宛てた書簡において、提案は自らの捕虜体験を踏まえて提出したものであり、収容所の捕虜のあいだには親ドイツ（オーストリア）と反ドイツ（オーストリア）との対立があり、捕虜解放の方策には困難さが伴うことを忠告している⁴⁰。

幣原喜重郎外務次官は山梨半造陸軍次官に宛て 5 月 5 日付の文書で、ニエメツの提案を撤回し、バプスト仏大使の申し出にそって南スラヴ捕虜の解放にあたることを伝えた⁴¹。こうして、フランス大使館が青野原と習志野の捕虜収容所にいる南スラヴ捕虜の本国帰還を進めることになった。南スラヴ捕虜の大半は水兵であり、将校は二人にすぎなかった。かれらが新生の南スラヴ統一国家セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国について、どれほどの情報を得ていたのか、新生国家に対してどのよ

³⁸ JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1317 在本邦ユーゴースラヴ系俘虜解放ニ関スル件、大正 8 年 (1919) 5 月 5 日 (防衛省防衛研究所)。

³⁹ JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1318-1319 在本邦ユーゴースラヴ系俘虜解放ニ関スル件、大正 8 年 (1919) 5 月 5 日 (防衛省防衛研究所)。

⁴⁰ JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1321-1322 在本邦ユーゴースラヴ系俘虜解放ニ関スル件、大正 8 年 (1919) 5 月 5 日 (防衛省防衛研究所)。チェコスロヴァキア軍団がロシアの地で活動を活発にする以前には、チェコ人がセルビア義勇軍に参加する例は少なからず見られた。それは、本論文の 9 ページでふれたジュリッチのルポルタージュにも記されている。ロシア革命が生じ、ロシア帝国が崩壊したあと、今度はセルビア義勇軍兵士がチェコスロヴァキア軍団に参加する例が見られた。以下のエピソードは、その一例であろう。1919 年 8 月、ウラジオストクから帰国するチェコスロヴァキア軍団将兵 50 人を乗せたヘフロン号が、台風を避けようとして下関沖で座礁した。乗船していた将兵は船の修理を待つため、神戸に 2 か月ほど分宿しなければならなかった。この間に神戸の住民との交流が生じ、当時「セルビア戦歌」とされた「ウ・ボーイ」(現在も日本の男声合唱団の愛唱歌。クロアチアのオペラのフィナーレで歌われる曲と判明)が伝えられた。筆者は、チェコスロヴァキア軍団将兵の合唱団がなぜ「セルビア戦歌」を歌っていたのかに疑問をいだいてきた。しかし、これら将兵のなかにセルビア義勇軍から参加したクロアチア人がいたと考えれば、疑問は氷解する。「ウ・ボーイ」については、柴 宜弘『『ウ・ボーイ』をめぐって——男声合唱団の愛唱歌』柴 宜弘・石田信一編『クロアチアを知るための 60 章』明石書店、2013 年、311-315 ページを参照。ニエメツはチェコスロヴァキア軍団のこうした実状を把握していたことから、南スラヴ捕虜がチェコスロヴァキア軍団に服役する提案を行ったものと考えられる。

⁴¹ JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1315-1316 在本邦ユーゴースラヴ系俘虜解放ニ関スル件、大正 8 年 (1919) 5 月 5 日 (防衛省防衛研究所)。

うな考えをいただいていたのかは興味深い。それを知り得た人物がトドロヴィチであったと言えるが、トドロヴィチはこの点にふれた文書を残していないため、捕虜たちの心情を知ることができない。

フランス大使館は南スラヴ捕虜の実態調査という困難な作業に着手した。バプスト仏大使は9月6日付の外務大臣あて文書で、青野原と習志野の捕虜収容所の「セルブ、クロアト、スロヴェーヌ人」83名の名簿を作成したことを伝えた。この文書には、「セルブ、クロアト、スロヴェーヌ国政府ハ日本ニ於ケル同国民ノ利益代表ヲ仏蘭西国ニ委託スルコトニ決定致候ニ付今後ハ仏国大使館ニ於テ右俘虜八十三名ノ事務ヲ取扱可申候 ユーゴー、スラヴ人俘虜訪問ノ許可ハ外国語学校トドロウイツ氏ニ与ヘラレタル旨御通知ノ貴簡正ニ接受右ニ対スル御手数ヲ拝謝致候云々」⁴²とある。

ここに述べられているように、フランス大使館は8月27日付で外務大臣宛てに、トドロヴィチが習志野及び青野原俘虜収容所の「ユーゴースラヴ」人と面会するため訪問の許可願を提出していた。翌日にその許可が出され、幣原外務次官から山梨陸軍次官にその要請が送られた。9月3日、山梨陸軍次官から幣原外務次官に許可の返信があり、青野原と習志野の捕虜収容所にその旨伝えてあることを知らせている⁴³。このような経緯をたどり、トドロヴィチはフランス大使館を通じセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア王国の代表として、10月に習志野と青野原捕虜収容所を訪れて南スラヴ捕虜と面談のうえ、国籍選択の確認を行い、「解放願い」(Demand of Liberation)を提出してもらった。最終的に、習志野捕虜収容所の9人は11月30日に横浜埠頭から、青野原捕虜収容所の71名は12月2日に神戸埠頭から、総計80名がフランス汽船スファンクスに乗船し、新生の「未知の国」への帰国の途についた⁴⁴。

⁴² JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1353-1354 ユーゴースラヴ人俘虜解放ノ件、大正8年(1919)9月20日(防衛省防衛研究所)。

⁴³ JACAR 欧受大日記、Ref. C03025278100.0660-0679 在習志野及青野原「ユーゴースラヴ」人俘虜訪問願出ノ件、大正8年(1919)9月3日(防衛省防衛研究所)。

⁴⁴ JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1510-1515 「ユーゴースラヴ」人俘虜解放ノ件、大正8年(1919)9月20日(防衛省防衛研究所)。青野原捕虜収容所で、ハプスブルク帝国領の沿岸地方(キュステンラント)のモンファルコネ出身のイタリア系兵士は、ザグレブ行きを望み、国籍選択にあたり「ユーゴースラヴ国」とした。しかし、バプスト仏大使はこの兵士がイタリア人であることを勘案して、この兵士の申し出を受け入れなかった。JACAR 欧受大日記、Ref. C03025318000.1398-1407 「ユーゴースラヴ」人俘虜解放ノ件、大正8年(1919)11月10日(防衛省防衛研究所)。

写真1 チェコ人言語学者のアロイス・リハルト・ニクル（横浜、1914年）



（出典: Josef Ženka (ed.), *Alois Richard Nykl: Pedesát let jazykozpytce a filosofa*, Univerzita Karlova a Narodni Muzeum, Praha, 2016, 513.）

写真2 ヒンディー語教師、インド人のバラカトゥッラーがトドロヴィチに宛てた新年の挨拶状（1913年）。背後に英字雑誌『イスラーム同胞』が見える（アメリカ・カリフォルニア在のトドロヴィチの孫、Dana Todorovic氏所蔵）



写真3 ミラン・ラディスラフ・シチェフアーニク将軍



写真4 アレクサンダル・D・ジュリッチ(1891-1975) (出典: *Enciklopedija jugoslovenskih pisaca*, Beograd, 1980)



写真5 ラドイェ・ヤンコヴィチ少佐 (1879-1943 年)



Мајор Радоје Јанковић, 1913.